【研究論文】

書儀・尺牘表現の受容

――平安初期漢文書簡の表現を中心に

西　一　夫

本稿では、書儀・尺牘表現の受容実態を表現研究の観点から見通すと共に、奈良時代から平安初期の漢文書簡に書儀・尺牘表現がどのように受容され、史的展開を見せているかについて考察を加える。具体的には、書簡贈答のなかで用いられる書簡を示す表現に考察を加え、六朝の尺牘と唐代書儀との比較検討、また奈良時代の文書に取り込まれた表現との差異をあきらかにすることで漢文書簡の表現受容についての史的展開と特質の一端をしめす。

一　書儀・尺牘表現の受容

中国の文化受容、なかでも書儀・尺牘の形式と表現の受容研究については、つとに歴史学・社会学などの領域において進められてきた[i]。これは書儀が当時の礼儀書の側面を有していることから、中国の儀礼制度の受容を解明する上で有効な資料と位置付けられていたからである。かたや文学研究においては、平安初期の空海と最澄との間で交わされた書簡は当時の仏教教義解明の補助的資料として扱われるにとどまり、空海の書簡が収められている『高野雑筆集』末尾に附されている唐僧義空に関わる書簡についても充分な解明が行われているとは言いがたい[ii]。さらに圓仁『入唐求法巡礼行記』の書簡についても同様[iii]である。つまり平安初期の書簡表現が中国の書儀・尺牘表現といかなる受容関係を有するかについては考察が充分とは言えない。

さかのぼって奈良時代の受容研究については、小島憲之氏・芳賀紀雄氏を中心として、歌表現や表記の特質を解明するにあたって書儀・尺牘の性格や表現が積極的に活用されてきた[iv]。同時に正倉院文書の読解が進展したことから、同時代文書の受容実態についての解明が進展している。

二　書簡贈答の次第と関連語彙――萬葉集の書簡表現――

萬葉集巻五には、大宰帥大伴旅人が吉田宜に送った書簡に対する返書が残る。この書簡には贈答の次第を示す表現がいくつか見られ、これによって贈答の次第を把握することが可能となる。

宜啓。伏奉二四月六日賜書一。跪開二封函一、拝二読芳藻一。心神開朗、似レ懐二泰初之月一、鄙懐除祛、若レ披二楽広之天一。……(中略)……兼奉二垂示一、梅苑芳席、群英摛レ藻、松浦玉潭、仙媛贈答、類二杏壇各言之作一、疑二衡皐税駕之篇一。……(中略)……今因二相撲部領使一、謹付二片紙一。宜謹啓。不次。

(五・八六四～八六七書簡)

具体的には「賜書」「封函」「芳藻」「垂示」「片紙」を手がかりにして明らかにできよう。

まず書簡冒頭に日付と共に記される「賜書」は、敬意を含む表現が伴うことから、旅人からの書簡を指すと解して問題ない。同じ表現は「昨日述二短懐一、今朝汙二耳目一。更承二賜書一、且奉二不次一。死罪〻〻。」(一七・三九七三書簡、池主)が挙げられる。池主から家持に送られた書簡には歌も存していることから「賜書」は三月三日付けの家持の長短歌(三九六九～三九七二)とその前文(新日本古典文

学大系脚注)のごとく、歌と書簡をあわせた表現と理解するのが穏当だろう。あくまで歌を贈るに際して書簡を添えているのであり、「一、応充給物等、昨日買求已訖。……但先日賜書云、……」(「慶宝充給物状」大日本古文書五・四〇〇)ような例では先立つ文書を指して「賜書」と表現しているのがより一般的な用法といえるだろう。つまり吉田宜の書簡では旅人の歌と書簡とを一体のものと理解して「賜書」と表現していると解することができる。なお、上代文献で複数確認できる「賜書」を、敦煌書儀や六朝の尺牘に先例を指摘することはできていない。

つづく「跪開二封函一、拝二読芳藻一」では対になる表現の「封函」と「芳藻」とが「賜書」を受けて贈答の状態をより明瞭に示している。「封函」は平安初期の例であるが「右、蕃客来朝之日所レ着、宰吏先開二封函一」。細勘二其由一、若違二故実一、……」(『類聚三代格』巻一八、天長五年一月二日)と来朝した使者が持参した文書の入った容器を意味する例が認められる。しかも「封」の文字を有することから、

因寓二緘封一、代申二情志一。(「新集雑別紙」P.4092)

などと同様に封印された状態であると認められる。このような封印された箱に収められた書簡は先立つ「賜書」を意味する。しかも書簡を箱に収めて贈る形態は、改まっていると推察されよう。そうした表現性を有する「封函」は、先立つ海彼の例に恵まれていないようであり、語順の逆転した「通レ婚函書　往来皆須二以函封一、無レ函者可レ用レ紙。」(「新定書儀鏡」P.2619v)が書議題目の注記に指摘できるが、書儀本文では「況蒙二恩異一、特枉二栄函一。」(「新集雑別紙」P.4092)「豈謂二恩念一、特示二芳函一、不レ任二悚荷之至一。」(「新集雑別紙」P.4092)等の例が指摘できる。また「封」に着目するならば「哀叙。謹具二短封一。仲夏霖熱。」(「唐僧趙度より義空宛」『高野雑筆集』巻下)等の例が挙げられる。その実態については、箱を伴う書簡の贈答形態が明らかにされなくてはならないけれども、吉田宜の書簡で示された書簡語彙の展開は贈答の形態を考える上で考慮されてよいだろう[vi]。

かかる封緘に関する表現の形態は、「封」を前項にする用例は書儀ではなお認められず、後接する例が基本となる。「函」については後接語彙が基本となるようである。このような状況からすれば、先掲の「新定書儀鏡」の転倒した例は貴重であろう。

「封函」を開き取り出された「芳藻」は、後続の表現に「兼奉二垂示一」とあることから推して、書簡本文を指し示していると解して問題はなかろう。接頭語「芳」には表現の広がりが認められ、「忽奉二芳音一、惟深傾悚。」(杜友晋『書儀鏡』S.329)等の例が指摘できるとともに「芳書」「芳函」「芳翰」等の類似例が存するのに対して「芳藻」で書簡を意味する例は、なお用例に恵まれない状況である。

「封函」と対をなすと位置づけられる「垂示」は、「忽辱二芳書一、并蒙二恵賜一。」(杜友晋『書儀鏡』S.329)を類似例として示しうるように、書簡とモノとをあわせて贈る場合の書簡記載の類型と考えられる。しかも「垂示」は、

今状附往、惟検領、使次二垂示一、不レ貲二遅々一、幸也。謹附状不宣。謹状。

(「嘱四海求事意書(答書)」『書儀鏡』S.329)

望垂示。幸甚幸甚。不宣謹状。

(空海「左兵衛督藤相公宛」『高野雑筆集』巻上)

から推察できるように、身分関係をある程度示しており、「垂」そのものも上位から下位への関係を示す意味を有している[vii]。

このような書簡冒頭の表現を考察することによって、書簡贈答の形態をある程度推定することが可能となる。ただ、書儀においても実際の書簡においても、これ程までに書簡贈答の形態が書き込まれた例は稀であり、それぞれの表現が個別に用いられるのにとどまるのが現実である。

書簡冒頭の表現から贈答のありようを見通すことは、書簡末尾の表現にも留意しなくてはならない。取り上げた書簡末尾には、「不十分なわが書面の謙称」(井村哲夫『萬葉集全注』)「自分の書簡を謙遜していう。」(伊藤博『萬葉集釋注』)との指摘がある「謹付二片紙一」と言う表現が存する。書簡の文脈からすれば、先学が指摘する意味を有していると判断して問題がない。だが、「博訪二知之一者。片紙殘行。事事二各異一。」(晉干宝「表」『初学記』)「高宋嘗以二片紙一、書二若海名一」(『宋史』汪若海伝)等の例からすれば、当該語は「紙切れ」を表しているものの、諸注釈が説くような謙遜意味を有しているとは言い難い。しかも、書儀・尺牘での確例が認め難く、自らの書簡をどのように表現するかは、今後も検討を要する事項と言える。

上代文学に見られる書簡を手がかりに贈答関係を見通すと同時に、それぞれの語の性格をも検討してきた。かような傾向が平安初期の漢文書簡ではいかなる状況となるのか。さらには奈良・平安初期の漢文書簡の表現を見通すことによって、漢字文化としての時代層の一端を以下で検討する。

三　書簡語彙の検討①—書簡を示す語彙—

考察の中心をなすのは、書簡自体を表す語彙の性格、つまり語性を明らかにすることである。ここで検討の俎上に乗せるのは平安初期の漢文書簡は空海と最澄を中心にしながら『入唐巡礼行記』におさめられる圓仁の書簡も参照する。また『高野雑筆集』巻末所載の唐僧義空の書簡も実際に用いられた唐人の書簡表現として用いる。

三・一　「札」のばあい

書簡を表現する語彙の一部に「札」が用いられるばあいがある。本来「薄い木のふだ」を意味する語であるが、その「札」を繋ぎ合わせて「冊」とし、文書を表す「札書」「札翰」等が存する。

この「札」が相手の書簡（来簡）を意味する語彙として、以下に示す起筆部分を中心に広く認められる。

［空海書簡］

空海の書簡は『高野雑筆集』（大谷大学図書館蔵）によれば七四通を数える[viii]。これらのなかで「札」を有する書簡語彙は以下の六例である。

久不レ承二音札一、馳仰惟積。（甲州の藤太守宛）

雲霞眇然、音札久寂。（某師宛）

馳仰之次、枉二音札一。……忽見二来書一、悚息極深也。（唐僧都宛）

……今、披二音札一、承二平達花下一。（筑前栄井王宛）

伏承二金札一、即擬レ参二会法筵一。（宛先不明）

忽恵二書札一、深以慰レ情。（最澄宛）

空海の書簡では「音札」「金札」「書札」の三例が存し、うち「音札」が四例と他の二例との使用量に差異が認められる。「音札」に明確な敬意表現は認められないものの、前後の文脈では来簡に対する敬いの表現が求められ、さまざまな人物に対して用いられている

ことから、この語に対して空海は汎用性を認めていた[ix]と推察される。なお、宛先不明書簡に用いられている「金札」については、次の最澄書簡の検討で取り上げる。

［最澄書簡］

最澄の書簡は『伝教大師消息』（石山寺尊賢筆文化六年本）では四七通[x]を数え、うち二五通が空海にあてられた書簡である。それらの書簡の中で「札」を有する書簡語彙は以下の二通である。

辱枉二金札一、深慰二下情一。（空海宛）

辱枉二金札一、告二伝法旨一。（空海宛）

いずれも空海宛の書簡であり、空海からもたらされた来簡を「金札」と称している。空海への書簡が半数を数えるなかで空海からの来簡を表現したものには「金札」の他に「垂書」二例と「承レ書」「迎問」の各一例を追加するにとどまる。このような傾向にあるのは、最澄の書簡が経典の借覧などの実務的な書簡が多く、「謹啓」「借請」「弟子最澄和南」等の形式に拠る書簡が複数存する点にも留意すべきだろう。

だが、空海宛の書簡に「金札」[xi]をはじめとして「垂書」[xii]「迎問」等の敬意表現を含む語彙を来簡に用いていることからすれば、最澄は空海との関係を的確に書簡に反映させていたと言えよう。以下は「札」を伴う語彙が海彼で用いられている用例である。

［圓仁書簡］

…所レ付書札、随レ波没落。恨恨之情、無レ日不レ積。

［唐僧義空関連書簡］

……前月中、京使至。竟謝二垂情一、特賜二札示一。（徐公祐から義空宛）

圓仁書簡は役人に宛てた書簡であるけれども、「書札」をはじめ前後の表現にも特段の敬意表現が込められているとは思われない。かたや義空宛の書簡は「謝二垂情一」に「垂」が存し、「賜二札示一」の「札示」に「賜」と敬意表現が用いられていることから推せば、徐公祐が義空に対して敬いの心情を示していた。

かかる書簡語彙に「札」を用いる例を書儀文例から確認するならば、上接するのは「魚雁、莫レ吝二札示一」、幸甚幸甚」（P.3730「書札」）程度に限られている。また下接するのは「…厦蒙二芳札一、恵レ以二徳音一」」（S.5472「朋友書儀」）「傾年不レ枉二刀札一、是以不レ敢二通書一」（S.1438v「吐番占領敦煌初期漢族書儀」）等の用例が拾える程度である。つまり、書儀では広範に用いられる表現とは言いがたく、書儀文例の傾向からすれば「札」を用いた来簡表現は限定的であったと推察される。

「札」の語義を手がかりに書簡を明確にする「書」「音」等と熟語化する傾向と装飾性を示す「金」との熟語化がはかられたと整理できよう。なお、「札」を有する書簡表現は上代には認められない。

三・二　「書」のばあい

書簡語彙に用いられる表現として「書」を伴う表現は、意味と表現とが明瞭で汎用性を持つ表現であったと推察される。

［空海書簡］

空海の書簡に用いられる「書」を有する表現は、

書信枉問、兼恵二珍繒綿布等物一。（某高官宛）

前枉二書信一、承三坤儀薬二栄養一。（前安州判官宛）

得二書信一、委レ意。（泰金剛宛）

等の「書信」と、以下の語彙とに分けられる。

忽恵二書札一、深以慰レ情。（最澄宛）

忽披二枉書一。（最澄宛）

信満至。辱枉二一封書状及一章新詩一。（渤海国王孝廉宛）

……忽見二来書一、悚息極深也。（唐僧都宛）

前者は「書」「信」いずれも書簡を意味し[xiii]、同義語を組み合わせた表現である。第一例目の「書信」に続く「枉問」も「起居をお尋ねいただき」[xiv]という意味であり、二例目の「枉二書信一」を参照して「枉レ問」とすれば、「書簡をいただく」と解することも可能であろう。

後者の「書札」はすでに述べたとおりである。「枉書」は前者の「枉問」と同様に解し得る例である。「来書」は方向性を示す「来」を冠することで、相手の書簡であることを明示している。いずれも書簡を表す語に敬意を含むことはなく、「枉」「恵」「披」等によって相手の書簡に敬いの表現を示している。

［最澄書簡］

最澄の書簡は、先の「札」の表現と同様に、「書」を有する表現は同じ表現の二例にとどまり、いずれも空海宛の書簡であることが留意される。

伏承二垂書一、深慰二下情一。（空海宛）

忽得二垂書一、恰似二対面一。（空海宛）

「垂書」は「札」の項で述べたように、「金札」と同様に語彙そのものが敬意表現を内包していると解されよう。「金札」「垂書」いずれにしても最澄から空海に送られた書簡で用いられている点は、なお留意すべきである。つまり、前後の文脈の中で敬意を表現する場合と書簡に敬意表現を直截用いる場合との相違を明確化することにつながるのである。

唐僧義空関連書簡では、これまで見てきたような傾向から外れるような表現は認められない。「書問」はいずれも書簡を意味する類義語を重ねた語彙であり、「来書」は先掲の空海書簡「忽見二来書一」と同様である。いずれも語彙自体に敬意表現を込めているとは言えず、「奉」「蒙」といった前後の文脈によって敬意を表している。

楽棟廻奉二書問一、頓慰二下情一。（日本僧真寂から義空宛）

蒙閣梨到蒙二書問一、具知二彼徳趣平善深一。（唐僧法漪から義空宛）

忽奉二来書一、又恵二跨帯一。（徐公祐から義空宛）

「書」を伴う語彙では、実際の書簡では語彙自体に敬意を含む語彙は「垂書」「枉書」等と少なく、前後の文脈によって敬意を示していると考えられる。

このような傾向にある書簡語彙を書儀文例と比較するならば、「書」が下接する語彙として来書・手書・音書・芳書等があげられ、上接する語彙として書示・書誨・書疏等があげられる[xv]。上接語彙の書示・書誨・書疏は、いずれも類義語の組み合わせで形成されており、下接語彙の手書・音書も同様と判断できる。かたや下接語彙の来書は書簡の方向性を示す「来」と書簡を表す「書」とが熟語化している。同じく下接語彙の芳書は上接の「芳」が下接の「書」を修飾する形になっており、同様な構成の書簡語彙は語彙としての表現に広がりがある[xvi]。

このような語彙の傾向を踏まえて、上代の漢文書簡に見られる傾向を確認しておきたい。『萬葉集』に存する書簡に用いられている語彙には来書・先書・賜書があり、前二例は方向性を示す表現と書簡を示す表現とが熟語化した例である。三例目は「賜レ書」と読む可能性があるものの、「一、応充給物等、昨日買求已訖。……但先日賜書云、……」（「慶宝充給物状」大日本古文書五・四〇〇）等を参照すれば一語の名詞と解して敬意表現を含む書簡語彙を位置づ

けられよう。

以上のような書簡を指し示す表現の傾向は汎用性を持ち、相手に対する敬意をどのように示すかにあるといえる。実用の書簡からは書簡をやりとりする人間関係が、類型的ではあるものの看て取れるのだろう。このような実用書簡の表現と範文化した書儀文例とは、汎用性と位置づけることが難しい表現の存在によって、両者の乖離は明確化する。

四　書簡語彙の検討②―装飾性を有する表現―

汎用性を有することが書儀文例においては重要である。そのため書儀文例は社会身分などによって使用する語彙が唐代頃にある程度制度化され、完成していたと考えられている。これらの表現にしたがって実務的な内容を記すのであれば、書儀文例の類型的表現を用いれば、簡潔かつ正確に用件を伝えることが可能となる。その反面、類型化した表現には書き手が文飾を凝らす要因は排除されてしまうのである。そうした狭間のなかで平安初期の空海は独自の表現を実現した人物なのではないか。

空海が文飾を凝らし装飾性を有する書簡表現と最澄などが修飾を凝らしている書簡とを比較しながら空海書簡の表現特質に迫ってみたい。まず注目すべき特質は、相手の書簡を風や雲に喩えている点であろう。

風信払レ岩、雲書排レ窟。（東宮大夫宛）

風信雲書、従レ天翔臨。（最澄宛）

……風吹有レ便、莫レ惜二金玉一。（清修理亮宛）

従レ承二籍甚一、思渇惟深。風信来、払二雲霧一。忽開二珍藻一、慰二調飢一。（宛先不明）

……此際、披二雲箋一、先憑二手書一。（梵釈寺永忠から空海宛）

時因二風雲一、恵二及金玉一。（徳一宛）

「風信」「雲書」「雲箋」はいずれも来簡を意味し、天象物を比喩的に用いて書簡を指し示している。このような比喩表現を用いた書簡は書儀・尺牘では見出しがたく、「雲」を用いた「仕侶既衆、益友如レ雲」（「与二知故在レ京書」『杜家立成雑書要略』）とたくさんの物や人が集まることの比喩に用いられるのが一般的な用法と考えられる。また風と雲が書簡を意味する語（信・書・箋）を修飾する関係は、いずれにも共通する要素である。空海は風や雲を遠く離れた人物とを繋ぐ存在と認識して潤色を加えたと考えられる。

そうした表現技法を凝らすのみならず、

伏開二玉検一、已奉二天私之高深一。（某相国宛）

伏承二金札一、即擬レ参二会法筵一。（宛先不明）

のごとく、書簡を表す検や札に玉や金等の修飾語を加えて美的な書簡語彙を用いているのである。類似関係として位置づけられるのは、先掲の最澄が空海に宛てた「辱枉二金札一、深慰二下情一。」「辱枉二金札一、告二伝法旨一。」をはじめとして、圓仁の「昨日、伏奉二芳旨一、諸事欲二成就一。」「…先蒙二芳旨一。」等があげられる。いずれも下接する語が書簡を意味し、上接する語が書簡を美的に修飾する関係にある。

このような関係は唐僧義空関係の「…自二舎弟廻日一、忽奉二芳音一。」（徐公祐から義空宛）等に認められ、さらには書儀文例でも同様な表現が多様に存するのである。

［芳―］芳函・芳翰・芳誨・芳及・芳緘・芳示・芳書・芳問・芳音・芳札

［華―］華翰・華緘

［栄―］栄翰・栄函・栄誨・栄緘・栄示・栄問
［琅（瓊）―］琅函・瓊章

これらの表現と空海書簡の「風信」「雲書」「雲箋」とを比較すれば、空海の独自表現が際立つといえよう。また六朝尺牘も書儀文例と同様な語彙が広く使用されている状況は留意されてよいのではないか。つまり、書簡を示す表現に風や雲を修飾的に用いているのみならず、徳一宛書簡が「風雲」で書簡を指し示すのには、

瞻二望風雲一、朝夕嗚咽。
（陳徐陵「在二北斉一与二梁大尉王僧弁一書」『文苑英華』巻六七七）

をはじめとして、『毛詩』（邶風・静女）を踏まえた「瞻二望風雲一、但増二搔首一」（「与二知故別久一書」『杜家立成雑書要略』）等の「風雲」との関連を想起すべきだろう。先掲の徳一宛書簡の「風雲」は、遠く隔てられた両者を繋ぐ存在として捉えられ、書簡と密接な関係をなしていると認められる。しかも『萬葉集』にも「今勅二風雲一、発二遣徴使一」（巻十八・四一二八～四一三一書簡、大伴家持）と書簡を意味する用法が見られるものの、書簡表現としての成熟は十分とは言いがたいようである。ならば、空海は海彼の文学表現を踏まえながら、平安初期の書簡において独自の発想を示していたと位置づけられよう。

五　小　結

空海の書簡表現の特色を見通すために同時代の最澄の書簡や圓仁、さらには唐僧義空の書簡などを手がかりにして考察を進めてきた。範とすべき書儀文例などとの共通点を有しながらも、来簡を表現するに際して空を行き交う風や雲を表現に取り込んでいる背景に海彼の文学表現を意識しているであろう事実には独自性が認められよう。かたや最澄が用いている書簡自体に敬意を込めた表現は、書儀文例や実際の書簡・尺牘にも用いられていることから、汎用性を有し個性化は図られていない。

平安初期の書簡表現は、書儀文例等の類型的表現に依拠した例が多くを占めるなか、空海の風と雲を用いて書簡を表現している事実は、彼の豊かな文学才能の一端と認められるのである。

（平成二十五年六月四日稿）

追記

本稿は「奈良・平安初期漢文書簡に見る敦煌書儀表現受容の史的展開」（基盤研究C 4520210）での研究成果である。第四章の内容については「平安初期漢文書簡にみる書儀・尺牘表現の受容」（2013年超域的日本語教育学国際学術シンポジウム―学際的複合領域研究としての日本語教育学を目指して―、2013年五月十八日、中國文化大學（台湾））と題して概要を報告している。

本稿の執筆が大幅に遅れたことにより、会員諸氏には多大なるご迷惑、ご心配をかけたこと、心からお詫び申しあげる。

i 内藤湖南氏「正倉院蔵二旧鈔本に就きて」（『内藤湖南全集 第七巻』筑摩書房、1970年）、那波利貞氏「『元和新定書儀』と杜有晉の編する『吉凶書儀』とに就いて」（京都大学『史林』第四五巻一号、1962年）、山田英雄氏「日・唐・羅・渤間の国書について」「書儀について」（『日本古代史攷』岩波書店、1987年）、弥永貞三氏「日本の古文書と書札礼―極東文化の二つの道―」（『古文書研究』四四・四五合併号、1997年）などが、早い成果としてあげられる。また、正倉院文書の書儀受容の実態を総合的に考察している近年の成果として、丸山裕美子氏「書儀の受容について―正倉院文書にみる『書儀の世界』―」（『正倉院文書研究4』1996年十一月）がある。さらに東野治之氏「出土資料から見た漢文の受容―漢文学展開の背景」（『国文学 解釈と教材の研究』第四四巻十一号、1999年九月）では歴史学と考古学の成果を受けて、上代における書簡文体の受容に言及がある。

ii 高木神元氏「唐僧義空の来朝をめぐる諸問題」（『空海思想の書誌的研究』

高木神元著作集4、法藏館、1990年)所載の校訂本文と略注が存するのみのようである。また史的事実の考証については田中史生氏「唐人の対日交易―『萬葉集』下巻所収「唐人書簡」の分析から―」(関東学院大学「経済系」第二二九集、2006年)、大槻暢子氏「唐僧義空についての初歩的考察―唐商除公祐から義空への書簡―」(関西大学「東アジア文化交渉研究」創刊号、2008年)を参照。

iii 小野勝年氏『入唐求法巡礼行記の研究』(財団法人鈴木学術財団、1964年)参照。

iv 小島憲之氏「海東と西域―啓蒙期としてみた上代文学の一面―」(『萬葉以前―上代びとの表現』岩波書店、1986年)は代表される研究成果の一つである。芳賀紀雄氏「萬葉集における「報」と「和」の問題―詩題・書簡との関連をめぐって―」「願文・書儀の受容―海東と西域の問題」(『萬葉集における中國文學の受容』塙書房、2003年)参照。また「典籍受容の諸問題」(同書所収)の「書儀・尺牘類」「敦煌文書・吐魯番出土文書」も参照。

v 正倉院文書の「請暇解」のうち「請暇不参解」については、奈良女子大学二一世紀COEプログラム(古代日本形成の特質解明の研究教育拠点)報告集Vol.4『正倉院文書の訓読と註釈―請暇不参解編(一)―』(2005年十二月)、同Vol.9『正倉院文書の訓読と註釈―請暇不参解編(二)―』(2007年三月)の二冊の報告書によって不参解全文の注釈がおこなわれている。

vi 近時、山本孝子氏「ハコを用いた封緘方法―敦煌書儀による一考察」(「敦煌写本研究年報」第七号、2013年三月)において、書簡贈答の形式での箱利用に関する考察が網羅的に行われている。

vii「垂」については楊莉氏「敦煌書儀の「相迎書」の待遇表現について」(奈良女子大学「人間文化研究科年報」第二三号、2008年三月)参照。

viii『高野雑筆集』によれば空海書簡の他に唐僧義空宛の書簡が十八通併載されている(高木神元氏『空海と最澄の手紙』法藏館、1999年)。

ix 張小豔氏『敦煌書儀語言研究』(商務印書館、2007年)では「音札」は取り上げられていないものの、類似例と位置づけられる「音問」が敬意を含む例として扱われている。このことからすれば当該例にも敬意を含む考えられるが、「芳」「金」等の明確な敬意表現とはある程度の区別が可能だと判断する。なお、同書では中性的な書簡語彙に「刀札」が取り上げられている。

x 高木神元氏『空海と最澄の手紙』(法藏館、1999年)参照。

xi十 張小豔氏『敦煌書儀語言研究』(商務印書館、2007年)では「金札」は取り上げられていないが、類似例と考えられる「金玉」は来簡に敬意を示す表現の一例として取り上げられている。

xii「垂書」については楊莉氏「敦煌書儀の「相迎書」の待遇表現について」(奈良女子大学「人間文化研究科年報」第二三号、2008年三月)参照。

xiii 王啓濤氏『吐魯番出土文書詞語考釋』(四川出版集団巴蜀書社、2005年)、張小豔氏『敦煌書儀語言研究』(商務印書館、2007年)参照。

xiv 高木神元氏『空海と最澄の手紙』(法藏館、1999年)の訳文による。

xv 掲出用例は基本的に張小豔氏『敦煌書儀語言研究』(商務印書館、2007年)による。ただし筆者の本文調査によって追加した用例がある。

xvi 張小豔氏『敦煌書儀語言研究』(商務印書館、2007年)参照。

(にし　かずお　信州大学教育学部)